



ウルグアイ東方共和国

República Oriental del Uruguay



ホセ・ムヒカ氏の世界観である 『人々の幸せを目指した開発』を实践する国ウルグアイ

小林 一三

はじめに

ウルグアイで2010年3月から5年間大統領を務めたホセ・ムヒカ氏は、日本を含めて世界で最も有名なウルグアイ人の一人です。モンテビデオの郊外にある小さな農場に夫人と二人で暮らし、年代物の車とトラクターを自ら運転して「慎ましく」生活する姿は、『世界一貧しい大統領』と評され、メディア等で頻繁に取り上げられています。

一方、ムヒカ氏は、世界が直面する貧困や環境問題等に関するユニークな発言でも注目され、特に2012年6月にリオデジャネイロで開催された「国連持続可能な開発会議」でのスピーチは有名です¹。同氏曰く、『貧乏な人とは、物を少ししか持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足できない人』です。いくらお金を稼いでも、幸せとは無関係な物をローンで購入し、ローンの返済のためにさらに働く人は、無限の欲望を追求する消費社会に毒されて一生を終える貧しい人です。人生は短く、必要最低限の物さえ持てば、人が幸せになるために必要なのはそれ以外のもの、つまり、愛、家族、友人等であり、リウマチを患う自身の経験から健康の大切さも示唆します。資本主義がもたらした浪費社会を

批判し、『人々の幸せを目指した開発』とは何かを問うムヒカ氏は、この世の中を変革するためには、人々の意識改革のみならず政治の役割も重要であると主張しています。

さて、筆者はウルグアイに赴任し、モンテビデオで約2年間生活していますが、ムヒカ氏のミニマリスト的な世界観は、同氏の生き方のみならず、ウルグアイ政府の近年の開発政策や人々の暮らしぶりにも反映されていると思います²。以下では、筆者の観察を裏付ける具体例を紹介しますが、限られた経験と主観に基づく記述のため、事実の誤認等があればご容赦願います。

人々が「慎ましく」生活している国

ウルグアイにも貧富の格差が存在しますが、他のラテンアメリカ諸国ほど顕著ではありません。モンテビデオでは、ホームレスは見かけますが、義務教育が行き届いているためか、ストリートチルドレンはほとんど見かけません。

ウルグアイはラテンアメリカでも中流階級以上の層が厚い国ですが、多くの人々は地味な格好をして、物は古くなくても大切に使い、派手な消費生活を送っている様子はあまり窥えません。私事で恐縮ですが、筆者はあるスポーツクラブの会員ですが、裕福そうなウルグ



モンテビデオの街では小型の車が多い（写真はすべて執筆者撮影）

アイ人の会員を見ても、「慎ましい」と感じます。ゴルフクラブやテニスラケット、さらにスポーツウェアや靴等の「衣」に関しては、品質の良いものを長く愛用している様子です。

また、「衣」だけでなく、人にもよりますが、ウルグアイ人の性格もラテンアメリカの中では「慎ましい」と感じます。日本人と同じで、人見知りで物静かですが、根は優しくて親切な人が多いと感じます。

ウルグアイ人の「慎ましさ」は、モンテビデオの街の様子にも反映されています。ラテンアメリカでは、ウルグアイと同様に経済成長が著しいパナマの首都などは、ベンツやレクサスなど世界中の高級車で溢れています。一方、モンテビデオでは、空港のタクシーはベンツですが、市内ではピカピカな高級車よりもスズキなどコンパクトな車が目立ちます。人々は、見栄よりも実用性を重視するようです。運転マナーも、一部のタクシーを除き、他国に比べれば「慎ましい」と感じます。さらに、空

港の免税店を除けば、ブランド品を専門に売る店もあり見かけません。派手なネオンが輝く歓楽街も無さそうです。

ウルグアイ人の「慎ましさ」は、「食」にも反映されています。ラテンアメリカの多くの国では、所得と生活水準の向上にともない、人々は食生活にも質の高さとバラエティーを求めるようになりました。こうしたニーズに応え、最近では、ペルーのリマを筆頭に、多くの都市で世界レベルのレストランが出現していますが、モンテビデオは例外です。一般的に、ウルグアイ人の食生活は質素かつ保守的で、贅沢なグルメや珍しい料理にはあまり関心が無さそうです。高級そうな店は存在しますが、昔からの定番であるステーキ以外の料理については、海外から注目されるレベルには達していないと思います。

日本では「衣食足りて礼節を知る」という諺がありますが、ウルグアイではムヒカ氏に批判的な人も多い中流階級以上の層も含めて、衣食（住）がある程度満たさ

れば、残るお金やエネルギーは人生でもっと大切なものに使うと考える人が多いようです。

政府が国民の健康管理に熱心な国

日本と同じく、ウルグアイでも高齢化が進み、生活習慣病の予防等に関する人々の関心が高まっています。ムヒカ氏も、人が幸せに生きるためには健康が大切と述べています。ウルグアイ政府は国民の健康管理のために様々な政策を実施していますが、低所得者向けの医療サービスや在宅医療システムの充実以外に、いかにもウルグアイらしいのは以下の政策です。

ウルグアイの食料自給率は100%を遥かに超え、国民の腹はほぼ満たされていますが、政府は質的な意味での食料安全保障の改善も目指しています。例えば、“Uruguay Natural”（自然のままのウルグアイ）のスローガンを掲げ、農牧業では、農薬、化学肥料、人工飼料等を極力使用しない自然農法を推奨し、消費者の健康に配慮しています。また、焼肉レストラン等に対し



ウルグアイのグルメと言えば、昔も今もアサード（ステーキ）とTannat（タナ）品種のワイン



観光やグルメのスローガンは「Uruguay Natural」（自然のままのウルグアイ）



菓子を含む加工食品には「遺伝子組替（T）」、「糖質過多」、「脂質過多」等のラベルが貼られている

ては、塩分等を極力控えてサービスするように指導し、加工食品には「遺伝子組替」、「糖質過多」、「脂質過多」等のラベル表示が義務付けられています。

もちろん、どのレストランでも客が望めば塩や胡椒が出てきますし、注意喚起のラベルが張られた商品を買うかどうかは消費者の自由であり、国民の健康管理はあくまで自己責任が原則です。一方、筆者の観察では、ラテンアメリカの他の国に比べて、ウルグアイでは社会階層に拘わらず極端に肥満な人は少ないと感じます。新型コロナウイルスの感染拡大がある程度抑えられているのも、健康管理に関する一連の政策と国民の意識の高さによるところが大きいかと思います。

エコな社会造りを目指す国

ムヒカ氏は、地球環境問題の解決には各国のイニシアティブが必要と述べていますが、ウルグアイの政府は以前から、石油や石炭など化石燃料への依存を減らし、脱炭素社会の実現に向けた政策に積極的

に取り組んでいます。電力に限れば、すでに大半が水力と再生可能エネルギー（風力、バイオマス、太陽光等）で賄われています。モンテビデオでは電気自動車（バスとタクシー）も導入されています。さらに、化石燃料の輸入を減らし、エネルギーの自給率を高めることで、エネルギー分野での安全保障政策も推進されています。

廃棄物（ゴミ）の管理については、小売店等のレジ袋は有料で、材質も環境に優しいものであることが義務付けられています。都市部の多くでは、廃棄物（ゴミ）の分別収集が行われています。しかしながら、筆者の印象では、3Rの概念で言えば、物を長く大切に使う習慣によってゴミは減量（リデュース）されていますが、再使用（リユース）と再生（リサイクル）についてはさらに改善の余地がありそうです。また、モンテビデオでは多くの家庭がペットを飼っていますが、犬が散歩中に落とす糞まで Uruguay Natural では困るので、後始末について飼い主の意識を高める必要があります。

スマートな社会造りを目指す国

ムヒカ氏は、人類は石器時代に戻る必要は無く、開発の成果は人間の幸せに向けるべきとも述べています。

ウルグアイはラテンアメリカの中でも、日常生活でインターネットやスマホ等のIT技術が最も活用されている国の一つです。パソコンも小中学生全員を対象に無償で貸与されています。モンテビデオでは、庶民の足であるバスの運行状況は、スマホのアプリで瞬時に確認できます。新型コロナ対策用に開発されたアプリは、感染状況からワクチンの接種計画まで詳細な情報を提供してくれます。



モンテビデオの街中に設置されたゴミ箱。左はリサイクル品、右はそれ以外と大雑把だが分別収集されている



モンテビデオでは、愛犬を連れて、ラプラタ河沿いでマテ茶を飲みながら寛ぐ人が多い

コロナ禍で盛んになったオンラインによる授業や職場会議では、zoom や teams 等のアプリがフルに活用されています。

さて、ウルグアイがスマートな国になるためには、いくつか課題があります。その一つは、人間が生活する上で「衣」と「食」と並んで重要な「住」です。モンテビデオの近郊でも、未だに不法占拠した土地に住む人や、雨風を防ぐには十分で無い家屋に住んでいる人がいます。ムヒカ氏の政権の時代から、政府は低所得者向けに質の良い住宅を供給する政策を推進していますが、昨年発足した保守連合による新政権もこれを引き継いで努力中です。

『人々の幸せを目指した開発』を 実践する国

1 年前から始まったコロナ禍で

は、所得水準が高い欧米の先進国でさえ、国民の命や健康を十分に守れない現実が明らかになりました。一方、ウルグアイは、所得水準は先進国に及びませんが、食料とエネルギーの安全保障と並んで貧困層向けの教育や保健医療など人間の安全保障も充実させてことで、地球温暖化、リーマンショックのような経済危機、さらに感染症など、グローバリズムがもたらす負の影響にうまく対応しています。さらに、ウルグアイは、どこの国とも仲良くすることで、IT 技術の普及や貿易投資の拡大など、グローバリズムの恩恵を十分に活用している国でもあります。

ムヒカ氏のスピーチから 3 年後の 2015 年 9 月に、国連は 2030 年に向けた「SDG s（持続可能な開発目標）」を採択しましたが、『人々の幸せを目指した開発』を

実践してきたウルグアイは、10 年後には SDG s 達成の優等生国として世界から注目されるかもしれません。

（本稿において意見に関する部分は筆者個人の見解であり、所属する組織を代表するものではありません。）

1 https://medios.presidencia.gub.uy/jm_portal/2012/noticias/NO_E600/mujrio.pdf

本稿では、上記の原文を筆者が翻訳ないし意訳しました。

2 2020年3月、ムヒカ氏が所属する左派連合から保守連合への政権交代が行われましたが、開発政策については両者の間で大きな差はない模様です。

（こばやし かずみ 国際協力機構（JICA）
ウルグアイ支所長）

ラテンアメリカ参考図書案内



『ルベン・ダリオ物語全集』

Rubén Darío 渡邊尚人訳 文芸社
2021 年 4 月 483 頁 1,600 円＋税 ISBN978-4-286-22498-5

本書は、ニカラグアの国民的詩人でモデルニズム文学の巨匠、ルベン・ダリオの『物語全集』の初の邦訳である。ルベン・ダリオは、その詩で有名であるが、100 以上の短編物語や散文も執筆しており、代表作「青…」、「冒涇の散文」、「ニカラグアへの旅」等に掲載された作品を中心に新聞、雑誌、文学誌等に掲載された未発表作品も含めて 86 作品が掲載されている。

モデルニズム特有の広範な知的好奇心に基づく幅広いテーマ、愛や人生、青春、女性美、生と死、富裕なブルジョアと貧しき芸術家の対比、先住民世界、奇妙な逸話や伝説、神話、おとぎ話、戦争の英雄、コスモポリティズム、宗教的神秘、官能、空想と科学等につきルベン・ダリオは詩人、ジャーナリスト、外交官の目から皮肉とユーモアを交えながら、知的で自在な語り方で饒舌に語り、味わい深い現代的物語を紡いでいる。

そして本書には、作家吉本ばなな氏の帯文と序文、さらにニカラグア言語アカデミー会長、欧州王立博士アカデミー会長、ルベン・ダリオ世界運動会長の序文が寄せられており、ルベン・ダリオ研究の世界的な広がりを見ることができる。また「この、高潔で美しく甘い味を持つ魂の大きな力に、時代を超えて触れることができたとよかったと思う」との吉本ばなな氏の帯文は、本書の歴史を超えた文学的な重要性を惹起するものであろう。記者は、前駐バルセロナ日本国総領事。

〔渡邊 尚人―訳者紹介〕